



「富士三十六景ノ内 沼津河口の富士」
徳力 富吉郎 木版 昭和15年



「(沼津名勝)狩野川岸」 絵葉書 昭和初期



「東海道 沼津」 土屋 光逸 木版 昭和15年

寄贈資料の中から 木版画にみる狩野川河岸

沼津市下河原町の加藤雅功様から多数の版画の寄贈を受けました。今回はその中から狩野川河岸を描いた2点を同時代に発行された写真絵葉書とともに紹介します。どちらの版画も狩野川右岸に残る土蔵と富士山に題材を求めた作品で、昭和15年に制作されています。1点は土屋光逸作で御成橋付近の風景を、もう1点は徳力富吉郎作で永代橋付近の風景を描いています。

土屋光逸は明治3年生まれ、浜松出身の浮世絵師・版画家で、昭和24年に没しています。小林清親の門人でしたが、昭和初期に渡邊庄三郎に勧められて新版画を描くようになり、日本各地の風景版画を制作しています。この作品は建物の配置から、御成橋のたもと、魚町を望む景色とわかります。奥に見える二重の屋根は西洋建築で、大正時代に建てられた駿河銀行本店です。その向こうの屋根の上からは電柱がのぞき、街中では西洋化が進んでいる様子がかいまみられます。

徳力富吉郎は西本願寺絵所12代目の日本画家・版画家で、明治35年に生まれ平成12年に没しています。この作品は、昭和の富士三十六景のうちの一つとして制作されました。永代橋近くの仲町の河岸に並ぶ蔵と富士山が描かれています。画面左の坂は永代橋へと続き、荷を運ぶ人の行く先には荷物や材木が山積みされています。蔵の間にはそれぞれ階段があり、荷揚げされたものはここから倉庫へ運ばれます。画面右にある、屋号がしるされた蔵は仲町の八〇醤油店で、係留している船はこの頃運航していた巡航船とみられます。

狩野川河口から三枚橋町辺りまでの河岸は、江戸時代には港として利用されました。また、大型船との物資の中継や保管なども行われたため、三枚橋町から仲町にかけての河岸には土蔵が建ち並んでいました。魚町や仲町には魚を扱う商人が集まっており、小売、仲買、問屋などが分化し発達しました。

駿河湾の漁

金指 貢さんの漁話

網組長宝組の漁法 (3) 巾着網

・巾着網

巾着網は魚の群れを網で取り囲み、網の裾に付けたカンヅナ(環網)を巾着袋の口のように締めることで、網の中に入った魚を逃げられないようにして捕らえる漁法です。

巾着網には2艘の船で取り囲む2艘巻と1艘の船で取り囲む1艘巻があります。長宝組では、2艘巻の巾着網は昭和10年頃には行われていました。昭和53年頃からは1艘巻の巾着網に切り替えられました。

2艘巻の巾着網では両端のミアミ(身網)から始まり、ワキアミ(脇網)へ繋がり、丁度中央の部分がウオドリ(魚捕り)となります。2艘の船が網の両端を持ってカンヅナを締めて引き上げていき、最終的に魚を集めて捕える部分がウオドリです。2艘巻の巾着網では5種類ぐらいの網目の網を使用して、サバ・ヒライワシ(マイワシ)・カタクチ(カタクチイワシ)・シンコ(イワシの稚魚)を捕らえていました。

2艘巻の巾着網を行う時の船隊は網を積むアンブネ(網船)が2艘、集魚灯を灯して魚を集めるヒブネ(灯船)が2艘、捕らえた魚を運搬するハツドウキ(動力運搬船)が1艘という構成になります。バッテリー式の集魚灯を使用しますが、昭和13年頃まではガスの集魚灯を使用していました。そのため、ヒブネのことをガスブネとも呼んでいました。マグロの巾着網を行う場合は日中の操業となるので、ヒブネはテブネ(探索船)となります。網を揚げるときに使用するウィンチは昭和30年頃に油圧式のウィンチを導入しましたが、それ以前は人力のウィンチでした。「よーい、巻いた。よーい、巻いた。」と掛け声を出しながら巻きあげていきました。

第二次世界大戦後の頃に行っていた漁では3月頃か

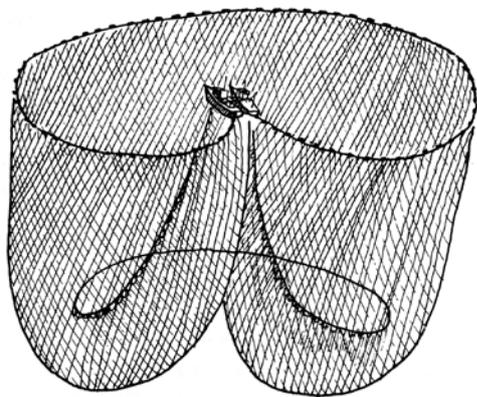


図1：巾着網(2艘巻)
(沼津市歴史民俗資料館編『沼津静浦の民俗』P48)

らアジやサバなどを捕る巾着網、4月～5月はサンマ揚線網、5月から8月頃まではマグロを捕るためのマカセ網、マグロのシーズンが終わるとサバ巾着網に切り替えていました。これは大まかな流れであって必ずしもこのように行っていたのではなく、来る魚によって臨機応変に網を切り替えて操業していました。巾着網では漁場まで行って狙っていた魚とは別の魚を発見したため、その魚用の巾着網に積み替えるために小海の港に帰るということもよくありました。

日中に行うマグロ巾着網を除くと、ほとんど夜～明け方に漁を行います。漁師は夕方頃に集まって漁に出かけます。ヒブネの集魚灯で魚を集めたところに巾着網を回してからカンヅナを締めて網を揚げていきます。集魚灯は一晩中つけていますが、朝方の一番漁が期待できるときにバッテリーが終わってしまうといけないので明るさを調節します。一晩で5回、6回と漁を行い、朝の8時頃には漁を終えて港へ帰ります。

魚群探知機を使用するようになってからはそれを頼りに漁を行います。その前は、縄をつけたピシヨウ(錘)を海に投げ入れ、縄に魚がコツコツとあたる度合から判断しました。朝になるにつれて激しく当たるようになって来れば、大漁を期待することができます。

昭和20年代以降、三重、高知、鹿児島など西日本を中心としたカツオ一本釣船が内浦湾に集結しました。そのカツオを釣るためのカツエサ(活餌)となるシンコを捕るために巾着網で漁をしました。生きたまま売らなければならないので、八角形の組み立て式の生簀を持って行き、魚があった場合にはその場で組んでその中で生かしました。そして、生簀を幾つも繋げてハツドウキで運びました。生簀の組み立ては若い漁師の仕事になります。シンコの漁期は4月～5月のまだ温かくなる前の時期のため、海に飛び込んでの仕事はつらい仕事の一つでした。

(話：金指 貢氏 昭和5年生まれ 沼津市三津在住)



写真1：長宝組が大瀬で行った巾着網(2艘巻)
(昭和52年 川上 貢氏撮影)

三浦点描③ おかべながかげ どうえいそう 岡部長景と東瀛荘4

『岡部長景日記』（尚友倶楽部編1993柏書房）には高田商会の高田慎蔵または釜吉氏の建てた別荘の建物がある程度補修し、延長600mに及ぶ水道を引いた記録などが見られるが、それ以上のことは記されていない。

三津の山本三郎さんから提供していただいた岡部氏の手記『子孫への語り草』や回顧録『観堂随話』（『岡部長景巢鴨日記』所収）には後の整備についての詳しい記載がある。これによれば、建物を取得してすぐに2階に1間を増築し、便所を修復して2夏は使っていたが、茅葺で快適さを欠き、次第に足が遠のいた。

昭和9年に三河台に住んでいた悦子夫人の御母堂加藤春路さん（加藤高明氏の妻、三菱財閥の創始者岩崎弥太郎氏の長女）の支援が得られることになり、全面的な整備に着手した。仰木魯堂という庭造りや建築の名人を紹介され、その監理の下、田舎家の移設、主屋の改築、松の草庵・茶室の新築の順に整備を図った。

田舎家は、昭和9年に東村山の江戸時代の百姓家を取得、移築したもので、茅葺の25坪くらいのを縮め、畳敷き3間に6畳の土間が着いたものであった。入口に不昧公（出雲松江藩主松平治郷はるきと）の「蒼松」の二字額が掲げられたため「蒼松軒」と名付けられた。

主屋は、1・2階にそれぞれ京間八畳の座敷2間を設け、北西側の海に面する縁側を四尺五寸幅に取った。1階には6畳の台所、8畳の茶の間、2階に9畳の居間や4.5畳の控室が配置され、下って中段に富士の見える浴室が附属し、総建坪72坪になった。特に名はつけなかったが、二階切妻に「夢鶴」の額が掲げられており、「夢鶴楼」と呼ぶのもよいと記されている。

松の草庵は、別荘地内の立ち枯れた松の大木を用材として建てたもので、十畳位の間で、中に大きな囲炉裏が、富士山の方に大きな丸窓が設けられていた。後に「富士見堂」と名づけられ、戦後に画家の梅原龍



長浜水揚場に残る東瀛荘に給水した水道タンク
(増設されたようで当時よりは規模が大きくなっている。)



東瀛荘から移設された十三重塔の現況（藤枝市岡部仮宿萬福寺跡・白色凝灰岩製、周囲に笠が降ろされている。)

三郎氏が滞在し、富士を画いたことで知られている。茶室は、草庵式の小さな二畳のもので、仰木老が喜寿を迎えたことから「大喜庵」と名付けた。

別荘の全体を示す「東瀛荘」の名称の由来は、中国の故事に「東海に仙人の栖む三島あり、曰く蓬莱、曰く瀛州、曰く方丈」とあるのに因み、瀛州は海の意であるので、東海道即ち東瀛としたとある。

このほか、隧道が掘られ、そこからの切石で十三重の石塔を建立した。岡部氏は藤原鎌足かまたりの子孫であると伝えられ、鎌足縁の談山神社の十三重の塔にちなんだものとも言われている。この石塔は、後に岡部氏の菩提寺であったといわれる岡部広幡村（藤枝市岡部）仮宿の廃寺萬福寺の岡部一族の墓の傍らに移設された。現在は、風化が激しく危険である為、規模を縮小して残されている。現地に残されている塔の石材は、まさに東瀛荘の地山を形成する白色凝灰岩である。

なお、『観堂随話』によれば、田舎家、富士見堂、茶室の3棟は、昭和33年に別荘を手放すに当たり、縁あって岸和田の佐々木勇蔵氏に譲られ、移築された。

長浜の菊地敬二さんに伺ったところ、「めったには入れるところではないが、暮れになると正月に殿さんが来るので、その前に園路の落ち葉掻きの依頼があり、その時に入った。集めた落ち葉は畑の堆肥にした。

松濤館を過ぎで富士見隧道の右手前に門があり、そこから石を積んだり地山の岩盤を削った石段が上っており、すぐに下に降りる小道が分かれ、それを下ると松濤館の裏手あたりに管理人の小池さんが住んでいる瓦屋根の家があった。石段をさらに登ると左にも小道が分かれ、大きな茅葺の田舎家や離れに続いていた。離れは丁度隧道の上くらいの位置で、海のほうに大きな窓があり、梅原画伯は此処から富士山の絵を描いたそうだ。主屋へはぐると長浜側に回り、玄関は二又のほうを向いていた。このほかに、巻物（掛け軸）がたくさん置いてある書斎のような建物があった。」そうである。

魚見のある風景⑮ 長浜小脇

下の写真は、下河原の加藤雅功さんが所蔵されている昭和14年に静岡県が発行した『静岡県史跡名勝天然記念物調査報告書 第十三集』に所収されている今野圓蔵氏の調査報告「静浦湾及内浦湾付近の地形と地質」に収められている内浦湾の写真です。たぶん同一と見られる写真が重寺の故秋山太郎から提供していただいた絵葉書の写真にも見られます。

この写真の左下隅を拡大したものが右の写真です。下端中央に丸太を組んだ魚見櫓うおみやぐらが立つ沖ノ島があり、



内浦湾（静岡県史跡名勝天然記念物調査報告第13集）



左上の城山の中腹には同じく丸太を組んだと見られる魚見櫓が写されています。よく見ると城山の先端近くの松の間にも丸太の先端が飛び出ています。この二つの櫓は丸太の先端を交差させており、その上に魚見の台が設けられているように見えます。

建切網たちきりあみの小脇こわきの漁場の入口には八角形の箱生糞はこいけすが並べられており、漁船も係留されているところから、既に漁場としての役目は果たしていないようです。したがって小脇の漁場のための魚見なのかどうかは不明です。高さもあり、あるいは、遠方を見張るオオミネの役目を果たすものかも知れません。

資料館からのお知らせ

企画展「江梨歳時記」開催中



2階展示室で2月7日から5月7日まで企画展「江梨歳時記～写された海辺の暮らし～」を開催しています。江梨の大瀬崎おおせで長年にわたって定置網漁業に従事し、現在は三重県の尾鷲市おわせに移られた川上貢さんと江梨在住で写真を趣味にしてこられた杉山栄一さんが撮影された写真から西浦江梨地域のかつての暮らしの様子を紹介する展示です。

懐かしい、過ぎ去ったかつての生活の様子を伝える貴重な写真を展示しています。忘れ去られていく地域の営みに触れていただきたいと思います。

資料集古文書目録の発行

資料館の資料集30として本年度は古文書目録「足保区有文書目録」を刊行します。西浦足保区に残された漁業関係を中心とする近世・近代文書の目録です。調査の際の資料検索の利便性を図るものです。広く活用していただきたいと思います。

沼津市歴史民俗資料館だより

2017. 3. 25 発行 Vol.41 No.4 (通巻213号)

編集・発行 〒410-0822 沼津市下香貫島郷2802-1

沼津御用邸記念公園内

沼津市歴史民俗資料館 TEL 055-932-6266

FAX 055-934-2436

URL <http://www.city.numazu.shizuoka.jp/kurashi/shisetsu/rekishiminzoku/index.htm>

E-mail: cul-rekimin@city.numazu.lg.jp